

温故知新セミナー

やむひら

# 士塾 講演録

〈歴史をつくった人たち〉

第1回 実野輝男



公益財団法人  
富士社会教育センター

## プロローグ

令和の時代を迎え、日本全体が新しい時代を歓迎するとともに、社会も変化を見せておられます。職場ではITや働き方改革の推進など、労働運動も新たな活動のあり方を求められております。このように時代が変化を求めている今こそ、「変えてはいけないもの」「継承するもの」を明確にする必要があるのではないのでしょうか。

この度、富士社会教育センターでは、温故知新セミナー「土塾」を開催することになりました。昭和の時代から運動に汗した方に、自分の志した運動、歩んだ道を語っていただくことを通して、「変えてはいけないもの」「継承しなければいけないもの」を学ぶ良い機会になりましたら幸いです。

第1回は、元電機連合神奈川地方協議会事務局長の実野輝男氏にご講演いただきました。実野氏は松下労組、電機連合神奈川地方協議会、全労済神奈川県本部で44年の

永きにわたり、労働運動・労働福祉運動でご活躍されました。

今回ご無理を言って、4時間という短時間の講演を講演録としてまとめました。そのため、少し背景、経過を割愛いたしました。また、こちらがテーマを選定させていただいたこともあり、この講演録は実野氏のご活躍の一部に過ぎないことをご了承ください。

現役時代、実野氏のカラオケの18番はHOUND DOG（ハウンド・ドッグ）の「ff（フォール ティシモ）」でしたが、実野氏はその歌詞の「夢を眠らせずあふれる思いをあきらめずに」を、労働運動においても体现されていきました。最近のカラオケは石原裕次郎さんの「わが人生に悔いなし」だそうです。44年の永きにわたるご活躍とご指導に改めて敬意と感謝を申し上げます。

今回は資料及び写真の提供に松下労組藤沢支部元委員長の中林治彦さんはじめ電機連合神奈川地協のみなさんにお世話になりました。大変ありがとうございました。



支部労働学校



支部結成 25 周年イベント ウルトラクイズ

(公財) 富士社会教育センター  
常務理事 武田 仁

はじめに 6

1. 松下労組の労働運動は 7
2. 藤沢支部支部執行委員へ 11
3. 労働組合の民主化への対応 13
4. 支部の組織活動を振り返り 17
5. 経営対策活動 19
6. 藤沢テレビ事業部の変遷 20
7. 経営対策の反省と後悔 23
8. 晴天の霹靂だった電機連合神奈川地協事務局長就任 25
9. 電機連合神奈川地協の活動は前任浅野事務局長の青写真を実現することだった 29

- 10 各種選挙の取り組み 29
- 11 早過ぎた政権交代 33
- 12 障害者福祉活動の取り組み 34
- 13 労働運動から労働福祉運動へ 37
- 14 リーダーに期待する 38

## はじめに

今回、このような機会をいただいたが正直、困惑している。もう一線を退いて10年余り経ち、かなり昔の話となつてしまった。決して歴史を語れるような立派な運動をしてきたとは思えないが、昔一緒に松下労組藤沢支部で運動した仲間である武田君からの強い要請を受け「これが最後」という気持ちで引き受けた。

これから話すことは40年から50年も昔の事である。多分、大方のことは今の時世に通じないことが多いと思うが、「そんな時代があつて今がある」ということを今の皆さんに少しでも伝えられたらと思う。それでは、話を進めたい。

私は1944（昭和19）年1月に生まれ、神奈川県藤沢市の明治中学卒業と同時に、1959（昭和34）年、松下電器産業株式会社乾電池事業部辻堂工場に入社した。入社1年後から神奈川県立湘南高校定時制に通い始めたのだが、これは当時教師になりたいという人生の夢を抱いていたためであった。

そんな折、1963（昭和38）年に私は松下労組乾電池辻堂支部の職場委員に選任

された。これが労働組合との関わりのスタートになったが、「させられた」というのが率直な感想だった。

## 1. 松下労組の労働運動は

当時の松下労組の労働運動について少し触れておきたい。

松下電器産業労働組合は当時の他の組合と同じように、終戦後GHQの指導のもと1946（昭和21）年1月に結成された。松下電器にはもともと「歩一会」という社員会があったため、松下幸之助創業者は労働組合の結成を心良しとしていなかった。しかし、「社主松下幸之助」は、労働組合の結成大会に招かれもしなかったが乗り込み、「正しい労働組合と、私の考える民主的な経営は必ずや一致する。労働組合と力を合わせ、新日本の建設に邁進しよう」と挨拶し、組合員はもとより来賓の国会議員をも感動させた。

この挨拶が、その後のGHQの財閥解体・公職追放命令に対して、組合員が「社主

追放除外に関する嘆願活動」として立ち上がり、撤回させることにつながった。まさに、労使の信頼から始まった松下電器の労働運動であった。

時代は昭和30年代に入り、世界は東西冷戦時代を迎えていた。日本国内も60年安保闘争など、社会・政治・労働組合が「イデオロギー対立の時代」となっていた一方で、経済も神武景気に代表される好景気に沸き戦後復興をとげることになった。松下電器もその好景気の中、当時「三種の神器」といわれたテレビ・冷蔵庫・洗濯機の第一次電化ブームで社員が増加し、会社の職制を次々と担っていく時代であった。労働組合の役員より会社の職制を優先し、組合役員の「なり手不足」となっていた。そのほかに、左翼思想（共産党員やそのシンパ）を持った者が本部役員に入ることによって労使は激しい対立関係となり、会社は「生産第一主義」、労働組合は「共産主義（マルクス・レーニン主義）」に基づき労働運動で争議・ストライキが頻発する状況になっていった。当時の労使関係の対立を語るエピソードとして、大阪（茨木）のテレビ工場に皇太子（現上皇）が工場見学に訪れた際、春闘中の組合員がハチマキを巻いて出迎えたことがあつ

た。それほど当時の組合は共産党の組合役員に牛耳られていた。

そんな中、労働組合主義（組合民主主義）に基づいた労働運動を求めて、後の松下労組委員長となる高畑敬一氏らが「松下労組近代化懇談会」を立ち上げ、全国各地の事業場・支部で水面下での活動を展開した。1962（昭和37）年、会社は賃金・身分制度の改定「職分制職能給制」を組合に提起した。左派に牛耳られていた組合本部は「絶対反対」、それに対して組合民主化グループは対案として「仕事別賃金制度」を掲げ、双方は激しく対立した。民主化グループは、同年の本部役員選挙で全面対立するも敗退した。しかし、左派系組合本部と数々の政策に対案を示し、翌年の1963（昭和38）年の本部役員選挙で組合民主化グループが全面勝利となった。しかし一方、各支部は昭和40年代にも尾を引くことになった。

そのような中で私は職場委員に就任した。当時、本部オルグは隣にあつた蓄電池支部から乾電池辻堂支部の順番になっていたのだが、蓄電池支部はまだ左派の勢力が多く、本部オルグが予定より遅れることがしばしばだった。私は定時制高校に通ってい

たので、早くオルグが終わってほしいという程度の気持ちだった。その当時の労働組合の内部対立は否が応でも、その時代背景から塀の上を歩いていて右に落ちるか、左に落ちるかという状況であったが、幸いにも私は右に落ちて現在に至ったのは、周りの先輩、上司、同僚、先輩が民主化の方に引っ張ってくれたお陰だと思う。

さて、夜学に慣れたころ、藤沢に「トランジスタテレビ」の工場ができるという話が上がった。テレビの中核であった茨木テレビはまだ左の勢力が多く、労働組合対策の関係から一部の基幹職だけの転勤で、後は他の事業部や近隣の「乾電池辻堂工場」「蓄電池事業部」からの転勤者と現地新規採用者でスタートすることになった。当時、新工場の中途採用の社員が辻堂工場で作業実習していたのを横目で見ながら、私には関係ないことと思っていた。ところがある日上司に呼ばれ「トランジスタテレビ」への転勤命令を受けた。転宅を伴わない転勤なので「明日返事をせよ」と言われ、一晩悩んだ。転勤命令を受けたものの、定時制高校の卒業前年であり、教師になりたいという別の夢を考えていたので葛藤したが、当時最先端のテレビの仕事ができることは

願ってもないことであり、その一員に選ばれたことに喜びを感じ、転勤を決断した。

一方、労働組合は、1963（昭和38）年に松下労組39番目の支部として「藤沢支部」が誕生した。私は電池しか知らないもので、転勤後、一生懸命にテレビの電気回路等の勉強をした。また、創業当時トランジスタは技術的に発展途上で、多くの問題があり大変苦労した。

翌1964（昭和39）年に私はサービス営業部門に配置された。市場サービス部門が修理依頼を受けたテレビの修理をしていたため、初めての東京オリンピックは名古屋のサービス会社に出張中で、まだ市場に出たてのカラーテレビで見っていた。

## 2. 藤沢支部支部執行委員へ

当時私は労働組合で全員大会の常任議長団を勤めていたが、1965（昭和40）年に支部執行委員に立候補せよとの話を受けた。後で先輩から聞いた話では、どうも私は組合要員だったようで、乾電池辻堂支部の「職場委員時代の言動」で目をつけられ